

堀
辰
雄

現代日本文学アルバム
JAPANESE MODERN LITERATURE IN PHOTOS

12

ATSUO
HORI

堀 辰雄

監修委員
川端康成
井上 靖

編集委員
足立巻一
奥野健男
尾崎秀樹
北 杜夫

現代日本文学アルバム

第12巻

堀 辰雄

昭和49年 8 月 1 日 初版発行



発行人 古岡秀人
編集責任者 桜田 満
発行所 株式会社 学習研究社
東京都大田区上池台 4 丁目40番 5 号
郵便番号 145 振替 東京 142930
電話 東京(03) 720 ー1111 (大代表)
印刷・製本 図書印刷株式会社
製函 永井紙器印刷株式会社
本文用紙 三菱製紙株式会社
表紙 特種製紙株式会社

*この本に関するお問合せやミスなどがありましたら、
文書は、東京都大田区上池台 4 丁目40番 5 号(〒145)
学研 ユーザー・サービス部
現代日本文学アルバム係へ
電話は、東京 (03) 720 ー1111 または
東京 (03) 727 ー1600へお願いします。

©1974 Printed in Japan

目次 TATSUO HORI

目次

堀辰雄文学へのいざない	5
-------------	---

堀辰雄文学紀行／縁のあとを追う	佐多 稲子	69
-----------------	-------	----

堀辰雄文学旅行ガイド	涌田 佑	101
------------	------	-----

堀辰雄の素顔	117
--------	-----

堀辰雄とその時代	小久保 実
.....	181

堀辰雄主要作品鑑賞小辞典	杉野 要吉
.....	213

年譜	谷田 昌平
.....	229

著作目録	谷田 昌平
.....	237

主要参考文献	杉野 要吉
.....	239

〔写真・資料提供〕

堀多恵

大竹新助

小川誠一郎

喜多川周之

葛巻義敏

佐藤太郎

神西百合

室生朝子

朝日新聞社

軽井沢町役場

共同通信社

国立国会図書館

日本近代文学館

毎日新聞社

読売新聞社

（五十音順敬称略）

編集スタッフ

編集責任

桜田 満

編集担当

宮下 襄

倉持貞雄

校正

須山康邦

写真

谷津富夫

地図製作

玉本図版社

装幀 大川泰央

レイアウト 大川泰央

堀辰雄文学へのいざない



雪におおわれてただずむ信州・^{いづれ}追分の石仏

その薬屋根の古い寺の、木ぶかい墓地へゆく小径のかたわらに、一体の小さな苔蒸した石仏が、笹むらのなかに何かしおらしい姿で、ちらちらと木洩れ日に光って見えている。いづれ観音像かなにかだろうし、しおらしいなどとはもってのほかだが、——いかにもお粗末なもので、石仏といっても、ここいらにはざらにある脆い焼石、——顔も鼻のあたりが欠け、天衣などもすっかり磨滅し、そのうえ苔がほとんど半身を被ってしまっているのだ。右手を頬にあてて、頭を傾げているその姿がちよっとおもしろい。

（大和路・信濃路^{しなのの}）より

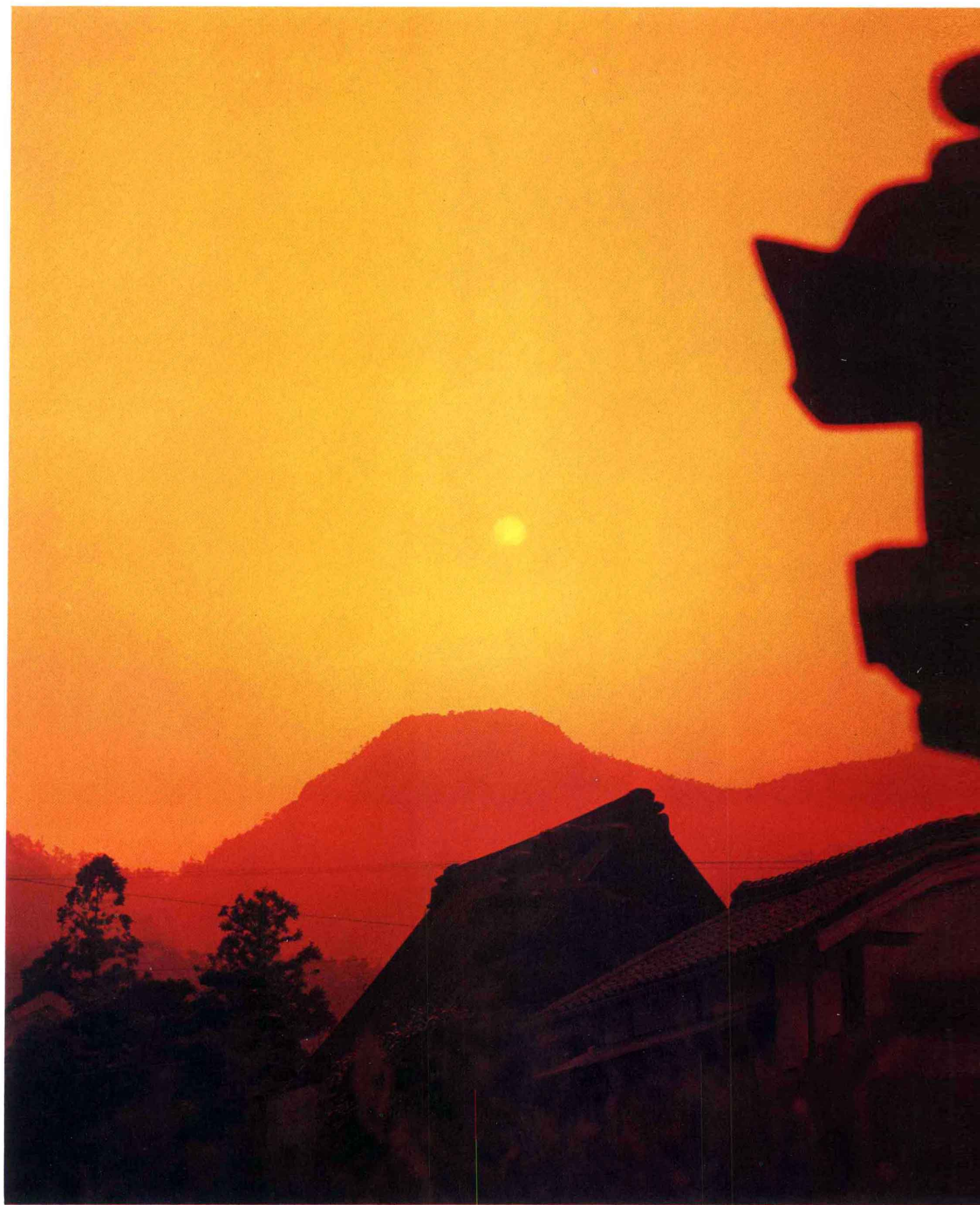
大和路・信濃路

……とにかく何処か大和の古い村を背景にして、Edo風なものが書いてみたい。そして出来るだけそれに万葉集的な気分を漂わせたいものだともう。……ケーベル博士によると、イデ、イルというのは、ギリシア語では「小さき絵」というほどの意だそう。そしてその中には、物静かな、小ぢんまりとした環境に生きている素朴な人達の、何物にも煩わせられない、自足した生活だけの描かれることが要求されている。

〔十月〕

◀夕日に映える二上山

わが国古代文化への憧れを抱いた堀辰雄は、大和の古い村を背景にした古代小説の構想をたてるため、奈良を訪れ、各地を歩き回った。「十月」「古墳」「浄瑠璃寺の春」は、その時の紀行文であり、「死者の書」は古代小説への情念を「主」と「客」という対話形式で著したものである。いずれも古代文化へ傾倒してゆく精神の躍動が脈打っている。また「斑雪」「辛夷の花」「櫓の上にて」は信州各地を歩き回った折の紀行文であり、「樹下」は追分にある石仏への思いを綴ったものである。





紅葉の奈良・唐招提寺講堂

◀ 奈良・薬師寺五重塔のシルエット

荒れた池の傍をとって、講堂の裏から薬師寺にはいり、金堂や塔のまわりをぶらぶらしながら、ときどき塔の相輪を見上げて、その水煙のなかに透かし彫りになって一人の天女の飛翔しつつある姿を、どうしたら一番よく捉まえられるだろうかと角度などを工夫してみていた。が、その水煙のなかにそういう天女を彫り込むような、すばらしい工夫を凝らした古人に比べると、いまどきの人間の工夫しようとしている事なんぞは何んと間が抜けていることだと気がついて、もう止める事にした。

(「十月」)

夕方、唐招提寺にて
いま、唐招提寺の松林のなかで、これを書いている。けさ新薬師寺のあたりを歩きながら、「或門のくづれてゐるに馬酔木かな」という秋桜子の句などを口ずさんでいるうちに、急に矢も楯もたまらなくなつて、此処に来てしまった。いま秋の日がはい金堂や講堂にあたつて、屋根瓦の上にも、丹の褪めかかった円柱にも、松の木の影が鮮やかに映っていた。それがたえず風にそよいでいる工合は、いうにいわれない爽やかさだ。

(「十月」)





ゆうがた、浅茅^{あさち}か原^{はら}のあたりだの、ついじのく
ずれから菜畑^{なえ}などの見えたりしている高畑^{たかね}の裏の
小径^{せうけい}だのをさまよいながら、きのうから念頭^{ねんとう}を去
らなくなった物語^{ものがたり}の女のうえを考^{かんが}えつづけていた。
こうして築土^{つきど}のくずれた小径^{せうけい}を、ときどき尾花^{おはな}な
どをかき分けるようにして歩いてみると、ふいと
自分のまえに女^{おんな}を捜^{さが}している狩衣^{かりぎ}すがたの男^{おとこ}が立
ちあらわれそうな気がしたり、そうかとおもうと
また、何処^{どこ}かから女^{おんな}のかなしげにすすり泣^{なみ}く音が
きこえて来るような気がして、おもわずぞっとし
たりした。これならば好^{この}い。僕はいつなん時^{とき}でも、
このまますすりつとその物語^{ものがたり}の中にはいつてゆけそ
うな気がする。……

(十月)



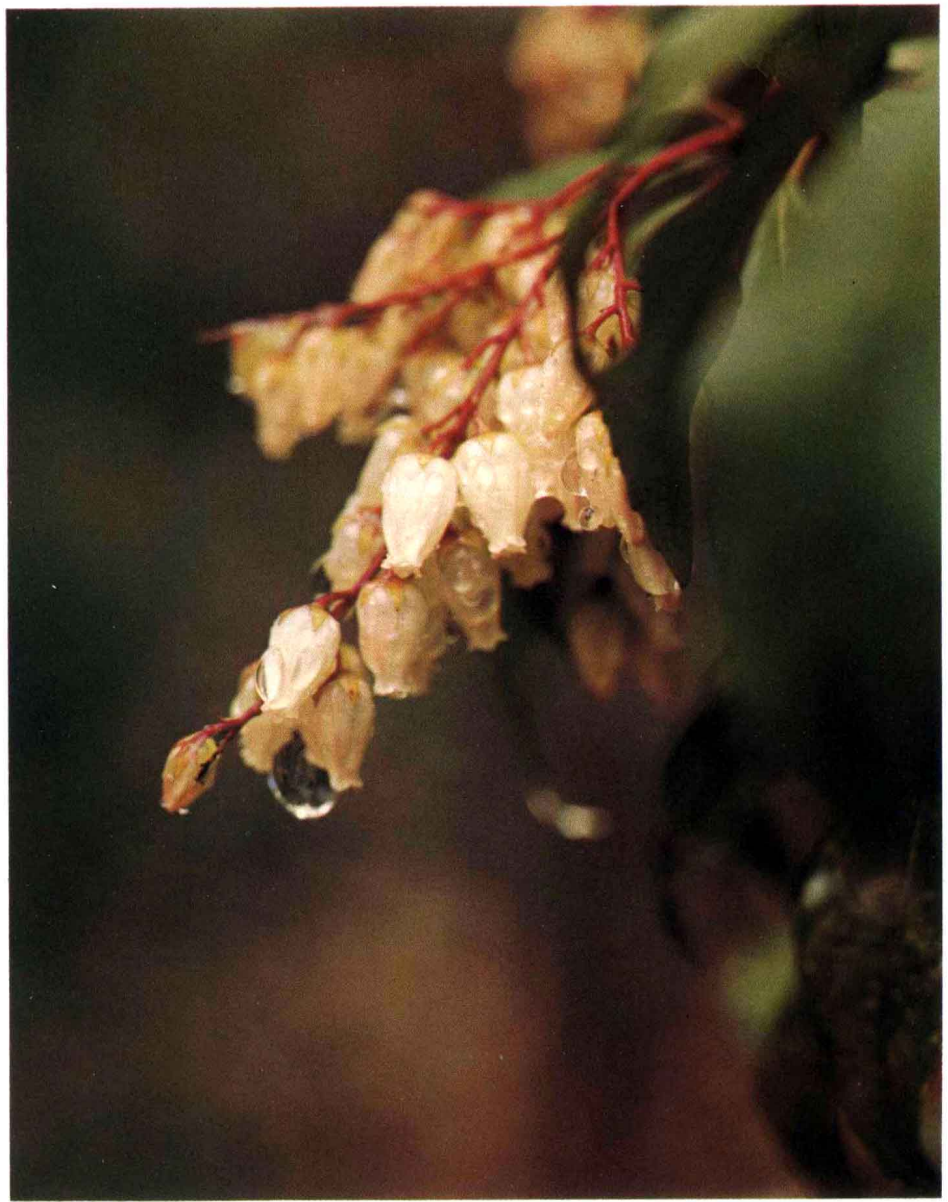
古代王朝小説の構想を練った奈良ホテル

あさむす 朝霧につつまれた奈良・荒池▶



十月十一日朝、ヴェランダにて
 けさは八時までゆっくりと寝た。
 あけがた静かで、寝心地はまことに
 いい。やっと窓をあけて見ると、僕
 の部屋がすぐ荒池に面していること
 だけは分かったが、向う側はまだほ
 おっと濃い霧につつまれているっき
 りで、もうちょっと僕にはお預けと
 いう形。なかなかもったいぶってい
 やあがる。さあ、この部屋で僕には
 どんな仕事が出来るか、なんだかこ
 う仕事を目の前にしながら嘘みたい
 に嬉しい。きょうはまあ軽い小手し
 らべに、ホテルから近い薬師寺ぐら
 いのところでも歩いて来よう。

〔十月〕



気品を漂わせて咲く馬酔木の花

その小さな門の中へ、石段を二つ三つ上がって、はいりかけながら、「ああ、こんなところに馬酔木が咲いている。」と僕はその門のかたわらに、丁度その門と殆ど同じくらいの高さに伸びた一本の灌木がいちめんに細かな白い花をふさふさと垂らしているのを認めると、自分のあとからくる妻のほうをむいて、得意そうにそれを指さして見せた。

「まあ、これがあなたの大好きな馬酔木の花？」妻もその灌木のそばに寄ってきながら、その細かな白い花を仔細に見ていたが、しまいは、なんということもなしに、そのふっさり垂れた一と塊りを掌のうえに載せたりしてみていた。

どこか犯しがたい気品がある、それでいて、どうにでもして手折って、ちよつと人に見せたいような、いじらしい風情をした花だ。

（「浄瑠璃寺の春」）



